

参考文献

本文歌詞の音声などを、左の参考文献と突き合わせ、異同を確認して主なものを後註一覧に掲げました。

- 民俗芸能全集 琉球欽定樂譜湛水流（山内盛彬、一九六五年）
琉球古典音樂安富祖流工工四各卷（安富祖流絃聲会、平成八年）
声楽譜附工工四各卷（野村流古典音樂保存会、平成十八年等）
琉球樂譜の研究（宮城嗣幸、県指定野村流伝統音樂保存会、平成十四年）
改訂版舞踊節組歌詞集（野村流合同協議会、平成九年）
沖縄三線節歌の読み方（大城米雄、沖縄教販、二〇〇三年）
標音評計琉歌全集（島袋盛敏、翁長俊郎、武蔵野書院、一九六八年）
琉歌大成（清水彰、沖縄タイムス社、一九九四年）
新公用文用字用語例集（内閣総理大臣官房総務課監修、ぎょうせい、平成十九年）

あとがき

現在までの沖縄語の書き方は、口語も文語も、書き手によりまちまちで、その様子は百花繚乱の感があります。沖縄の言語史を顧みれば、過去に、書法の確立を図る提案がなされても無益なものとして退けられたのは、沖縄語を公然と擁護することが許されなかつた時代の証しといえましょう。しまくとうばの挽回が公認された今、書法の乱れは、しまくとうばを次世代に引き継ぐのに大きな障害となっています。日本語が歴史の試練を経て、誰が書いても同じになる書き方に統一されたのと同様に、沖縄語も誰が書いても同じになるように、加えて学習負担を少なく、学力が上がる書き方を見出さなければ、沖縄語は発展しません。本研究における問題意識の焦点はここにあります。本研究に対しても多くの方々から率直なご意見を賜れば幸いに思います。